Bulletin of Tsukuba Developmental and Clinical Psychology, Vol.21 2010

新井邦二郎教授　退職記念寄稿

「三歳の親子の綱引き」考

On "tug-of-war" between parents and early infant

はじめに

筆者が，標記の言葉を最初に本の中に書いたのは，1997年に発刊した『図でわかる発達心理学』である。

そこでは，次のように記載した（ママ）。

「乳児期を過ぎて，子どもは随意運動をますます発達させ，からだを自分の意志どおりに動かすことに自信と喜びを強く持つようになります。子どもは，してはいけないことを含めてすべてのことをやりたがります。

また，表象能力の発達により，過去の出来事だけではなく，これから自分が行おうとすることも，あらかじめイメージに思い浮かべることができるようになり，子どもは自分なりの「つもり」を持ちながら行動するようになります。このように，自分なりのイメージと『つもり』をもちながら行動するようになると，親の制止を越えて自分のしたいことをやりとおそうとします。

なんでも自分の思いどおりにやり通そうとする子ども，それに歯止めをかけ『してよいことと』と『してはいけないこと』の区別をしつけようとする親との間に，2歳ごろから綱引きが始まり，3歳ごろにピークを迎えます。この綱引きで，常に子どもが勝てば，『わがまま』がますます助長され，反対に親が常に勝てば，『親の顔色を見て行動する子』になります。そのどちらにもならないような親子間の綱引きの関係が，適度の自己主張と自己コントロールをつくっていくことになるでしょう。」

このように，大人から見たら子どもの「いたずらやわがまま」が絶頂期を迎える3歳前後において，大人側が「この世の中は，キミの思いどおりにならないことがある」ということを，少し大仰な表現であるが，身体を張って最初に教える出来事が，「三歳の親子の綱引き」である。親子の綱引きは，この後も，子どもが親から完全に独立するまで続く。特に，親から見たら「ハラハラ，ドキドキする」ような行動が次から次へと現われる思春期において，3歳ごろのとき以上に子どもの自立や自尊心に神経を十分に使いながらの綱引きを再び頻繁に行うようになる。

本小論では，2，3歳ごろの幼児期の親子の綱引きについて再考してみる。

1．発達相談からみた「三歳の親子の綱引き」

子どもの発達の相談において，子どもの健全でないいろいろな発達と出会う。そのうちのひとつは，自己中心的で，何でも自分の思い通りに行動しようとする子どもである。このような子どもは友だちや園・学校と衝突して，不登園・不登校などを起こすようになる。もうひとつは，何事も自分で判断・決定することができず，親や教師に依存する主体性のない子どもである。このような子どもは，園や学校で意欲的な行動を取れない。

このように何事も自分の思い通りに行動しようとして問題が発生する子どもと，その反対に何事も自分から行動することができず問題が発

生する子どもの「分かれ道」は，どこから生じるのであろうか。その答えが，2，3歳頃から始まる「親子の綱引き」である。

乳児期は，親が子どもをどんなにかわいがっても，かわいがり過ぎることはないと言えよう。子どもは親から十分にかわいがられて，生涯を生きていくために必要な愛着や信頼感をつくりあげていくからである。その時期，子どもは自分の主張が親にほぼ全面的に受け入れられることを通して，「生きていくことへの安心感」や「人との温もりのある関係のよさ」を経験する。しかし，乳児を過ぎ2，3歳になると，「してよいこと」と「してはよくないこと」の「しつけ」が行われる時期となる。

この時期に「子どもが求めることは仕方がない」と言って，子どものしたいことを何でも認めて「親子の綱引き」を回避したり，反対に親が自分の考えで子どもに強く抑えつけて「綱引き」にいつも勝ってばかりいることが，後の問題発生の原点になっていると考えられる。

2．「三歳の親子の綱引き」と性格形成

幼児前期の親子の綱引きの勝負は，次の3つのいずれかになる。

①子どもが勝ってばかりいる
②親が勝ってばかりいる
③子どもが勝ったり親が勝ったり，いい勝負をしている

これに対応して，子どもの性格も，下図のような性格タイプを示すと仮説することができる。

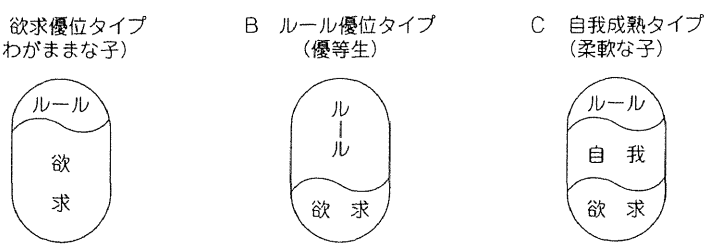
Aの「欲求優位タイプ」は，親が「親子の綱引き」を回避し子どもが勝ってばかりいる上記①に対応する。ルールを無視したり回避したりして自分の欲求に固執する性格となる。

Bの「ルール優位タイプ」は，「綱引き」で親が子どもを押さえつけ，親が勝ってばかりいる上記②に対応する。自分の身を守る「鎧」としてのルールを必要以上に守り，自分のやりたいことを放棄する性格（エンプティ・セルフ）である。

Cの「自我成熟タイプ」は，丁々発止の「親子の綱引き」の上記③に対応する。自己主張も自己コントロールもできるような自我の成熟が見られる性格である。

3．愛着と「三歳の親子の綱引き」

人間は少なくとも次のような二重の意味で社会的存在である。第1は，人は他者から愛され認められることを求め，それがかなったときに幸せを得ることができるという意味である。第2は，社会の決まりやルールを取り入れ，他者と適応的な関係を作り上げることを通して幸せを得ることができるという意味である。主に乳児期において形成する愛着や信頼感は，第1の意味での社会的存在として必要なものと言えよう。しかし，乳児期のこの経験だけでは，人は社会的存在として十分ではないことは明らかである。すなわち幼児前期に「親子の綱引き」を通して第2の意味の社会的存在としての必要な経験や学びを行わなければならないのである。このように愛着・信頼感の形成と「親子の綱引き」は，子どもが社会的存在として成長を図るためには欠かせない「車の両輪」であり，どちらが欠けても困る。



また，乳児期に愛着や信頼感が形成されると，幼児期に「親子の綱引き」をスムーズに行いやすいことも指摘できる。「ママが大好き」「パパが大好き」という愛着感情がしっかりと作られると，親の言うことを素直に受け入れていくことができるからである。

今後の課題

親が子どもにとって最初の「社会の壁」にならずして，誰が「社会の壁」となるのか。社会では通用しないような行動をしないことをわが子に教える親の役割は，子どもをかわいがる役割と同じくらい，重要なものである。

普段から自分の衝動をコントロールできない子ども，あるいはルールに沿った行動が難しく集団的な行動が取れない子どもなど，学校での適応に困難を示す子どもが目立つ。「発達障害」と理解されるようなこのような子どもの幼児期の「親子の綱引き」はどのようなものであったであろうか。また，相手との共生ではなく，相手を自分が生きるための手段とみなすような「搾取的人間関係」を特徴の一つとしている「自己愛性パーソナリティ障害」などと幼児期の「親子の綱引き」とはどのような関係にあるか，今後さらに検討してみたい。

文　　献

新井邦二郎（編著） 1997 『図でわかる発達心理学』 福村出版